

# 近現代史研究会 言叢

第61号

## 目次

第71回報告要旨	… 1
近代日本における建築技術者の文化運動 -1920年代、創宇社建築会の運動と思想を中心に-	
佐藤美弥	… 1
第72回報告要旨	
記憶の中のフランス・ファシズム —ラロック中佐の評価をめぐって— 剣持久木	… 19
事務局日誌	… 22
第77回研究会のお知らせ	… 23

2007年10月  
近現代史研究会事務局

## 第 71 回研究会

近現代史研究会第 71 回研究会は、2006 年 1 月 14 日（土）午後 2 時より立正大学 4 1 F 教室にて開催された（参加者 12 名）。報告者は、一橋大学の佐藤美弥氏であった。以下に佐藤報告の要旨を掲載する。

### 近代日本における建築技術者の文化運動 —1920年代、創宇社建築会の運動と思想を中心に—

佐藤 美弥

#### はじめに

1923 年秋、9 月 1 日に発生した関東大震災からまもなく、創宇社建築会（以下創宇社）が結成された。創宇社は通信省經理局營繕課工事係に勤務する建築技術者たち、しかも東京帝国大学のような高等教育機関でなく、尋常小学校高等科卒業程度の人びとに実務的な建築技術を教授する各種学校などを卒業して、技師と職工のあいだで製図や現場監督に従事した人びと（＝中間的技術者<sup>1</sup>）によって構成されていた点に特徴がある。彼らは 1923 年 12 月に第 1 回展を開催したのち、1930 年代はじめまで、おおよそ年 1 回の展覧会を開催し、自ら構想した建築作品を展示し、あるいは建築ジャーナリズムへ記事を掲載し、また講演会を開催するといった活動を展開した。このように集団によって、文化的な活動を行っているというかぎりでこの創宇社の一連の活動を文化運動とここでは呼ぶこととする。

建築に携わる人びとが集団として文化的な活動を行うことは、1920 年に東京帝大の卒業生によって結成された分離派建築会（以下分離派）を代表とし、1910 年代末からみられ、20 年代から 30 年代初頭に多くの団体が結成された。戦後にも、建築に携わる人びとをめぐる社会的な問題にまで関心を拡げた運動が展開されている。これらの運動は時代によって目的、スタイルを異にするものであるが、「建築運動」と呼ばれ一連の流れのなかで語られてきた。このことは、欧州の近代建築史において集団の活動——それはしばしば建築の範疇を超えた総合芸術運動としての側面をもつものであったが——が建築の思想、造形の表現を更新してきたという歴史観に寄り添うものであった。確かに欧米の建築史との類似を認めることもできるのであるが、さきに指摘したように日本における「建築運動」は時代ごとに異なる相貌をみせており、「建築運動」の名のもとに一括してしまうと見落としてしまう側面があらわれる。創宇社の運動はそうしたものひとつである。だから、「建築運動」という概念そのものを再検討する必要があるのだが、それについては別稿を用意したい。

この「建築運動」についての研究はこれまで近代建築史の通史のなかで記述されてきた。1950 年代、日本近代建築が歴史化される。稲垣栄三は「建築運動」を急速な近代化実現のための技術としての欧米建築の受容とそれに対する批判として提起されるものとし、1920 年以降の「建築運動」が欧米建築の拙速な受容つまり模倣に対置される、創造

的な芸術としての建築という観念を啓蒙する手段としての運動であったとしている<sup>2</sup>。つまり、稻垣において「建築運動」は主として建築の思想や造形の表現に関わる運動としてとらえられていたのである。

このような「建築運動」の評価のなかで創宇社はどのように位置づけられるだろうか。前掲稻垣、そして村松貞次郎の研究では創宇社の運動は技術的、思想的な能力が欠如した不完全な社会主義運動として評価される。特に村松は創宇社を生硬で内実に乏しいものであり、1930年代に建築界全般の運動が「弾圧」される原因になったという低い評価を与えている<sup>3</sup>。さきの「建築運動」の先行研究にみたようにそれが建築の思想・造形の更新にいかに貢献したのかという視点から諸運動をとらえるとき、その社会的な位置ゆえに自らの構想した建築が実現することはなかった創宇社の建築造形は評価に値しないものとなるし、アカデミックな訓練を経ない創宇社同人の言説は建築思想としても規定外のものとされざるを得ない。また、創宇社が1920年代半ばから急速にマルクス主義の思想を受容したことは「社会主義運動」と断じられる理由となったが、当時の全体社会の文化状況を考慮すれば、マルクス主義の枠組によって言論活動を展開することは一般的で、この点だけで創宇社を評価することはできない。

このように創宇社の運動は従来近代日本建築史の徒花的な現象としてとらえられることが多かったといってよい。しかし、この時期に創宇社同人のような人びとがこのような文化運動を展開する意味とはいかなる点に存しただろうか。たとえ、彼らの運動が実際の建築を作品として残さず、建築論の深化に影響を与えなかったとしても、彼らの建築表現、そして運動を通じた意見の表明からは主流を形成する文化をみるだけではみえてこない歴史像を見出すことができるのではないか。

以下、創宇社の運動の過程を明らかにし、その意味を探ってみたい。とくに本報告では結成当初、1923（大正12）年から1924年までを対象とする。あわせて、同時代の文化状況にも触れることとし、創宇社の運動・思想がどのような社会状況のなかで生まれ、展開したのかということを指摘したい。

## I 創宇社建築会の運動

### 1 運動の概観

同人たちは1900年前後に生まれ、尋常小学校、尋常小学校高等科、中学校の中途での教育を終えた後に、建築に関する実務的な技術を教授する各種学校などに学ぶ。その後、通信省営繕課工事係に雇員、あるいは下級の判任官として勤務している。彼らは東京帝大を筆頭とする高等教育機関を卒業し、官庁などで建築の計画を立案し、構造、意匠面で主導権を握る技師と現場で建築作業に従事する職工のあいだで、図面の清書や建設現場の監督を行う存在=中間的技術者だった。ここでの中間的技術者とは、近代的工業生産において専門的な教育を受け、生産ぜんたいを統括する技師と組織の末端で直接生産に従事する職工との中間で生産の現場を束ねる職長的な存在である。建築界でいえば、建築の構造、平面、意匠といった計画を行う建築技師と建築作業を担当する職人、職工のあいだで製図や現場の監理を行う人びとのことである。

創宇社は 1923（大正 12）年 9 月以降、関東大震災の直後の早い時期に 5 人の同人によって結成された【表 1】。1923 年 11 月 24 日から 28 日までの会期で開催された「第一回創宇社建築制作展覧会」を皮切りに 1930（昭和 5）年までに年 1 回、あるいは 2 回の展覧会を開催するほか、雑誌、新聞などのメディアへの記事掲載、講演会の開催などの活動を行っている【表 2】。彼らの活動は労働時間外における芸術作品の制作と公開を中心とした文化活動として特徴づけられる。

創宇社の中心人物が岡村蚊象（山口文象）である。彼は 1902 年清水組（現在の清水建設）月番棟梁の二男として生まれ、尋常小学校卒業後、東京高等工業学校附属職工徒弟学校木工科大工分科に学ぶ。卒業後清水組定夫として勤務した後、逓信省経理局営繕課工事係雇員として採用（1920 年 9 月）され、製図、現場監督などを担当する。震災後は内務省復興局嘱託（1927 年 9 月）となり、橋梁の意匠などに携わる。同じ頃、日本電力嘱託となり、後に黒部川電源開発に関わるダム・発電所の建設も担当する。その後民間事務所である、竹中工務店設計部技師（1926 年）、片岡・石本建築事務所主任技師（1927 年 9 月）となるが、その後同事務所を退社、渡欧し、ダム関係の調査を行うかたわら、世界的建築家であるグロピウスの事務所に勤務した。帰国後個人事務所を設立、モダニズム建築を得意とする代表的建築家、また建築論を展開する運動家として、戦前、戦後に活躍する<sup>4</sup>。

【表1】創宇社結成当時の同人一覧

創宇社	生年	没年	父の職業	出身地	学歴
岡村蚊象	1902	1978	大工棟梁	浅草田町	東京高等工業学校附属職工徒弟学校
梅田 穣	1904	1983	電信技師？	大井	中央工学校
小川光三	1903	1971	役人・画家？	向島	工手学校
広木亀吉	1904	1932	大工棟梁	深川亀住町	工手学校
専徒栄記	1903	不明			

※竹村新太郎談「創宇社建築会同人たちのこと」（『竹村文庫だより』6・7号、竹村文庫、1992・1993より作成。

## 【表2】創宇社関連年表（戦前まで）

1924	4	国民美術協会主催帝都復興創案展覧会（4. 13-28@上野竹の台陳列館）
1925	7	創宇社第三回建築制作展覧会（7. 17-21@銀座資生堂美術部）
1923	9	関東地震（9. 1）
	11	創宇社建築会結成
	11	第一回創宇社建築制作展覧会開催（11. 24-28@銀座十字屋楽器店）
1926	12	今和次郎から岡村蚊象に対して帝都復興創案展への出品要請
	5	単位三科の結成に参加
	10	創宇社第四回建築制作展（10. 22-26@日本橋白木屋呉服店）
1927	6	三科新興形成芸術展覧会（6. 3-12@日本橋千代田ビル、京橋宮沢家具店、数寄屋橋朝日講堂）
	12	創宇社無選共同建築展（12. 7-11@数寄屋橋朝日新聞社）
1929	2	創宇社第六回建築制作展覧会（2. 4-10@数寄屋橋朝日新聞社）
	10	新建築思潮講演会（10. 4@丸ノ内保険協会講堂）
	12	第七回創宇社建築制作展覧会（12. 10-16@数寄屋橋朝日新聞社）
1930	6	新興建築家聯盟第一回準備会（6. 23@学士会館）
	7	新興建築家聯盟第三回準備会並ニ成立総会（7. 18@神田基督教青年会）
	10	新興建築家聯盟第一回大会（10. 20@神田カフェーブラヂル） 創宇社第八回建築制作展覧会（10. 1-7@数寄屋橋朝日新聞社） 第二回新建築思潮講演会（10. 3@丸ノ内保険協会講堂）
	11	ソ連ハリコフ市のウクライナ劇場コンペ出品作の共同制作（下旬）
	12	「建築で赤の宣伝」『読売新聞』11. 12 新興建築家聯盟臨時総会（解散決議）（12. 1） 山口蚊象（岡村改姓）渡欧（下旬）
	5	第二次若槻内閣が官吏減俸令交付（5. 1） 下旬より通信省経理局内で創宇社同人を中心とする官吏減俸令反対闘争が展開
	6	『我等のニュース』の印刷・発行（6. 9）
	7	反対闘争のメンバー検挙（7. 11）→解雇（河裾・竹村・高井末吉ら）
1932	1	青年建築家聯盟の結成（1. 5）
	4	『建築科学』1発行
	5	青年建築家聯盟へ京都帝大学生グループdezam参加
	6	神田表裏樂町に青年建築家聯盟の事務所開設
	7	建築科学研究会へ名称変更
	8	『建科ニュース』1発行（7. 15）
	11	このころ運動の沈滞 『建科ニュース』4に「立直ってゆく建科」の宣伝
	2	『建築科学』6発行（最終号）
1933	5	事務所が芝区仲門前町へ移転
	10	懇談会（10. 27@神田愛光舎）で「青年建築家クラブ」への改組が満場一致で決議。席上「規約」、「趣意書」等の草案が提案・可決
	11	『青年建築家クラブニュース』1発行（11. 7）
1934	1	中心人物の西山卯三（京大→住宅営団）の入営、高井末吉（共産党シンパ）の検挙により運動の停滞
1934	12	火曜会結成
1935	10	『火曜会ニュース』1発行

『建築家山口文象 人と作品』、『竹村文庫だより』各号、『老兵は消えるか』を参照したほか、筆者が加筆した。

## 2 運動の背景

それでは、創宇社の運動の背景にはどのような状況が存していただろうか。

中間的技術者の誕生は近代化の進行による西洋の新しい建築技術の導入が前提としてあり、建築市場の拡大や建築の大規模化・複雑化がもたらす建築業の高度な分化に由来している。ここで詳述することはしないが、中間的技術者たちは建築業という創造性が高いと目された魅力的な職業に就くことを求め、非エリートとして 20 世紀初頭に確立した実業教育機関を経てきた人びとである。しかし、同時に中間的技術者が出現するころの建築業の組織は分業が進み、労働が細分化してもいたのだった。

中間的技術者を養成した代表的な学校のひとつである中央工学校の建築科教務主理であった後藤慶二は 1909 年あるいは翌年に執筆したと考えられる書簡のなかで、その生徒にかんして「生徒は可なり芸術に中てられ氣味なり」と評し<sup>5</sup>、1911 年に建築科の第一期生として同校を卒業した三宅安太郎は、建築にかんする知識を深めるために学校の課程以外に日本水彩画会研究所でデッサンを学んでいた。このように中間的技術者が養成されはじめる時期から彼らはたんに技術だけでなく、建築労働に存する芸術性に対して深い関心を示していた<sup>6</sup>。このような傾向は創宇社同人らの時代にもみられる。岡村は清水組の定夫から逓信省経理局工事係に転じた理由として「何かクリエーションしていかなきや〔中略〕、とにかく自分をエクスプレッションするという創作のほうへ」という思考の転回があったことをあげ、また逓信省での勤務のかたわら、本郷洋画研究所に通っていた<sup>7</sup>。梅田穰も同様に葵橋洋画研究所に通っていた<sup>8</sup>。このように 1910 年代から 1920 年代前半にかけて、建築界において中間的技術者たらんとした若者たちは総じて芸術に対する関心が高く、中間的技術者としての建築労働のなかに創造や表現の契機を見出そうとしていたことが推測される。いわば彼らは東京帝大の建築学科に象徴されるような学歴エリートとはことなる経路によって建築家になることをめざしたのである。それはたんに社会的な地位や高収入獲得することすなわち「立身出世」をはかる、ということだけではなく、その結果として得られる、建築労働を通じた創造や表現の実践の機会を求めていたといえるのではないか。

だが、当時彼らのおかれた労働の実態は、こうした労働を通じた創造や表現の欲求の充足という目的を果たすものではなかった。彼らの業務とは設計図面の清書と現場監理であった。職場には学歴に基づく官等により厳格な序列（技師一技手一雇員（一傭人））があり、序列ごとに細分化された作業は中間的技術者たちの欲求を充たさなかった。彼らが担当した業務には自由にデザインを行う余地はほとんど残されていなかつたし、また当時の建築観においては総合性こそ創造性の源泉と考えられていたからである。

だから、彼らは労働時間外における活動にこうした機会を見出そうとした。そのような傾向は個人的な芸術作品の制作に向かい、また建築界特有の機会としての公開建築設計競技に向かうのである。日本に設計競技が紹介されたのは明治末年、1907 年のことである。1910 年代以降には多くの実施例があり、大規模な公共建築が設計競技の対象となることも少なくなかった。その多くが公開競技で初期の大規模な設計競技において無名の若

手建築家が入賞することもあったので、新人建築家の登竜門的な性格をもつこととなった<sup>9</sup>。設計競技は学歴にかかわることなく誰もが平等に技術を競うことができ、結果的に入選せずとも、自らの創造性に基づいた建築作品を表現し、広く人々の目に触れさせられる機会となった<sup>10</sup>。また、1910年代後半には住宅改良の議論が高まっていたので博覧会や雑誌、新聞が主催する住宅の設計競技もあった。

のちの創宇社同人も積極的に設計競技に参加している。岡村と梅田は大阪市の工事現場に赴任しているさい大阪府庁舎の設計競技に参加したというし<sup>11</sup>、同じ頃神戸市の工事現場に赴任していた小川光三は分離派の展覧会に応募し入選したという<sup>12</sup>。彼らが創宇社を結成したのも設計競技や公募展への出品は重要な位置を占め、1924年に岡村が実弟の名で大連駅本家の設計競技に応募し、選外佳作2席に入選した例<sup>13</sup>、新聞社などが主催する住宅の設計競技に小川がたびたび出品、入選を果たし、結果発表の記事をファイリングしている例などをみることができる。1930年にはソ連ウクライナ共和国のハリコフ市に建設される劇場の競技にも創宇社はグループとしてプランを発表している<sup>14</sup>。

通信省営繕の中間的技術者のなかでもとくに芸術に関心が高く、創造や表現に関心が高いものたちは職場の人間関係のなかで同好のもの同志の集団を形成する。創宇社結成の核となった岡村と梅田は1920年にはほぼ同時期に工事係に入職した間柄であり、1921年12月に彼らは大阪中之島の工事現場に派遣されている。出張中には上にみたように絵画研究所に通い、共同で設計競技への応募作品を制作した。また休日には小川を含めて3人が大阪と神戸の間をお互いに行き来し、ときには京都や奈良に社寺や仏像のスケッチ旅行に出掛けることもあったという<sup>15</sup>。このような出張中の生活は互いの親近さを培い、芸術への関心という同じ志向をもつものを結びつける契機となった。

以上みてきたように、1920年代にあらわれる創宇社の運動の背景には、明治期以来の建築界の変容と、それがもたらした建築技術者にとっての労働の意味の変化が横たわっていた。ここで重要なのは、労働から創造や表現の契機が失われつつあったということだ。この創造・表現に対する欲求を充足するために中間的技術者たちは労働時間外での文化的な活動を行うにいたったといえるのではないか。こうした動向が1920年代の創宇社による建築運動に結実していくのである。

## II 創宇社建築会の思想

### 1 大正期の建築思想の潮流

創宇社の同人たちが芸術表現の機会を獲得しようとした、同好のものたちのゆるやかなグループをつくっていた。このような傾向を創宇社という確固としたかたちにまで推し進めたのが 1910 年代からの建築界における、若手建築家たちの言論活動が巻き起こした新しい建築思想の潮流だった。こうした既存の文化が創宇社に運動のスタイルを与えた。

明治期の建築家の使命とは欧米の建築技術を習得し、近代国家としての日本に適合的な建築を実現することだった。19 世紀末までにはこのような目標はおおかた達成され（赤坂離宮、日本銀行などをみよ）、建築思想の潮流は動搖した。

日露戦後の社会における対外的緊張の弛緩を背景として、個人への関心が高まり、個人の内面的な充実を図る人格主義、人格の向上を教養の獲得によって達成する教養主義、「生命の自由な発現」を求める「生命主義」<sup>16</sup> というような文化状況が生まれ、これは 1910 年代の社会を席巻した。このなかで建築界においても「自己」をキーワードとした建築表現・思想があらわれる。

ここでは詳述しないが、このような動きは若手の建築家によって、明治的な建築＝歐州歴史主義＝模倣の否定のうえに新たな建築表現＝自己の内奥を投影した創造的な表現をうちたてようとするものだった。彼らはしばしば建築学会や『建築雑誌』の外部で自ら結成した小グループをよりどころにそうした主張を展開した。早い例としては 1911 年に結成された建築会（これは固有名詞である）がある。月に 1 度の作品の品評会を行い、年に 2 回の大会で展覧会様のことも行ったという。互選した優秀作品は後述の国民美術協会の展観への出品なども行ったという。会員は 150 名を数え、5 年ほど活動が継続したという。また少しあとには後藤慶二を中心とした建築無名会が活動した。このグループのなかの有志は建築青年会を組織し、1918 年に議院建築の設計競技の当選案が歴史主義様式を採用したものであったことに抗議する展観を開催するなどした<sup>17</sup>。

このような若手建築家の動向のなかから分離派が結成される。分離派は 1920 年東京帝国大学工学部建築学科を卒業する 6 人の同人によって結成される。彼らは卒業間際の 2 月 1 日に「帝大分離派習作展覧会」を学内で開催、卒業後は官庁営繕、民間建設業、研究者へとそれぞれの道を進む。その年の 7 月の作品集の出版と白木屋での展覧会を皮切りに 1928 年までのあいだに東京で 7 回、大阪で 2 回の展観を開催する。分離派という名称は 1897 年のウィーン分離派に由来するものである。これは歐州の世紀末芸術の展開を背景に過去の様式を離れた新様式の実現をめざすものだった。このように分離派は同時代の歐州の芸術の新傾向を敏感に反映したものだった。

彼らは明治末以来の新しい建築技術の浸透と建築構造学への関心の高まりとともに支配的になる技術中心の建築觀を批判的に眺めていた。新技術とともに受け入れられる、合理主義、機能主義的な思想を一応肯定しながらも、技術だけでは建築が成立しないということ、つまり建築の本質であると彼らが考えていた芸術性の喪失への危機感の表明である。言い換れば急速な近代化に対する不安、あるいはとまどいとして分離派の運動は現れたのである。

そこでは「科学的研究」の必要性が認識されながらも「生命」や「豊かな感情」を建築の表現を通して実現されなければならないとされる。それが可能となるのは「物質生活」=工学的知識のみならず精神的知識をも包含する総合性をもつ建築においてであり、明治的な歐州歴史主義様式の模倣ではなく抽象的な記号の組合せによる人間の精神や生命の表現=創造的な表現においてである。

このような議論の一部は 1910 年代後半の若手建築家の建築論の一部にもみられるものである。そのうえで、分離派が注目されてきたのは、そのスタイルゆえである。分離派の運動が 1910 年代後半の運動と異なり、 1920 年代を通じて継続され、人々にその運動を強く印象づけ、「建築運動」の嚆矢として後々まで記憶されたのは、それが 1920 年代の社会の変化とつよく結びついたものだったからである。分離派という名称をグループに与え、宣言を起草するという方法は歐州の影響を受けた前衛芸術の動向と軌を一にするものだった。また、建築学会の機関誌『建築雑誌』だけでなく、市販の専門誌や新聞を利用し、岩波書店から作品集を出版し、展覧会では百貨店を会場とする。このようなメディアを有効に利用するスタイルは消費文化の発展を背景とするものにはかならない。この点で分離派はそれ以前とは大きく異なっていた。それゆえにこの運動は「建築運動」の祖型と考えられたのである。

## 2 創宇社の思想 ——「宣言」と岡村蚊象を中心に

関東大震災は地震とそれにともなう火災によって死者 99,331 人、行方不明者 43,476 人の被害を出し、340 万人が被災した未曾有の大災害だった<sup>18</sup>。東京市 15 区の大部分が焼失し、それ以後東京の景観が一変する契機となった。震災は、岡村蚊象や梅田と同様、多くの建築家の目に、明治期以来習得してきた近代建築技術の文字通りの崩壊を焼き付けた。その衝撃は従来の建築界に支配的であった建築觀の動搖をもたらした。震災以前に普及していた土蔵造や煉瓦造による建築量が減少し、一方で耐震や防火に有利な鉄筋コンクリート造など新技術による建築が著しく増加し、一建築あたりの床面積が増加した<sup>19</sup>。建築の合理化の進行である。新しい建築にはデザインの面においてもそれにふさわしい改新が試みられ、復興の過程では従来の歴史主義のデザインだけでなく、セセッションや表現主義など、同時代的にヨーロッパで流行した新傾向のデザインも採り入れられていく。

このような全体社会や建築界が大きく変化し思潮が揺らぐ状況において、創宇社は結成される。梅田は彼ら自身の運動を分離派よりも「もっとスケールでのかいものにしよう、『宇宙を創る』<sup>20</sup> なんてえのはどうだ」と、団体の名に「創宇社」を選んだ。そして宣言を起草した。

すでに同人らは創造や表現への欲求を基底とする志向を共有し、職場の同僚としての人間関係によって培われた親近さをもとにグループをかたちづくっていた。そのゆるやかなグループが震災を契機に諸メディア、職場を通じてすでに親しんでいた分離派の運動のスタイルを借用し、組織や宣言といった形式を整えていき、第一回創宇社建築会制作展覧会として結実する。

第1回展は11月 24 日から 28 日までの 5 日間、銀座三丁目の十字屋楽器店 2 階で開催

された。会場では、Z折の小さな目録が配布された。目録には出品作のタイトルと作者の氏名が印刷されていた<sup>21</sup>。最後のページには創宇社同人名で宣言文が掲載された。展覧会そのものは非常に小規模だったが、団体の結成、宣言の起草、そして設計図や模型を展覧会によって世に問うそのスタイルは分離派の影響を強く受けたものだった。

我等は古代人の純情なる  
創造の心を熱愛し、模倣てふ  
不純なる風潮に泣き  
永遠の母への憧れをもて  
退廃と陳腐にただれたる  
現建築界の覺醒を期す

×

我等は生の交響樂——全宇宙に  
いのち  
我等の生命・美しき「マツス」を  
見出すべく専心努力する。

創宇社同人<sup>22</sup>

この2段で構成された、詩のような「宣言」は梅田が書いた詩をもとに起草されたもので、一部に専徒の意見を取り入れたものだった<sup>23</sup>。一瞥すると創宇社が分離派から非常に強い影響を受けていたという事実を直ちに了解することができる。なぜなら、この宣言はすでに刊行されている分離派の作品集に掲載された分離派会員の論文や詩編から多くの部分をそっくり借用しているからである<sup>24</sup>。

また、前段で大きな主題となっている「古代人の純情なる創造の心」というフレーズは分離派会員石本喜久治の「建築還元論」に基づくものだった。このように創宇社はその出発点において、分離派に強く依存していた。しかし、それは単なる模倣ではなかった。あとにみるように創宇社の言説からは同人じしんの意識を読みとることもまた可能である。それでは宣言の内容をより詳細にみていくことにしよう。

前段の参照元と考えられる「建築還元論」<sup>25</sup>において石本は冒頭、「建築は一つの芸術である／このことを認めて下さい」と切り出す。石本は科学技術の発展が物質的要求を満たす一方、建築の「様式形態」への関心を減退させ、建築のデザインを「古き因襲や、標準権威」にとらわれたものにして、構造が進化したのにも関わらず、デザインの面では旧態依然とした歴史主義が幅をきかしている原因となっているというふうに考えた。このことは前章でみた分離派の思想の特徴でもある。石本は次のように訴える。

世界は行き詰まっています、精神的にも、物質的にも手ぬるい改善、改良ではなくて、直ちに根本改造に向かひ、過去五千年の歴史を捨てゝ、全く出直さなければなりません。即ち一切は還元せらるべきであります。そこにこそ真に新しい世界は開かれませう。われ～はあらゆる建築を還元して、そこから新建築を創めなければなりません<sup>26</sup>。

改造思想や進化論に影響された主張であることはいうまでもない。石本によれば、一切を還元したのちには2つの原動力が残る。「細胞遺伝と時代精神」つまり、歴史のなかで人類に蓄積されてきた「体得したエッセンス」と同時代的な「われ～に社会的背景たる現代な感覚」である。進化を妨げる病理としての過去への固執や模倣が除かることで、

「あらゆる模倣の形を憎み、あらゆる独創の態を頌揚することが出来る」のだという。石本は建築界にはびこる病理としての伝統・権威への固執や模倣を排除することを「還元」と呼び、自らの身体に遺伝的に蓄積された本能と現代的な感覚のみを新しい建築の制作原理とすることを訴えたのである。

それでは、その新建築はどのような形態をとるのだろうか。石本は還元された建築の基本は立方体と球がそれであると考えた。そして、「自然界に実在するものは一つとしてこの還元形〔立方体、球：引用者注〕をなすものではなく、建築もその究竟に到つては一つの立方体、一つの球をも許さぬ極めて複雑、高級な曲面体のみからなる理想形を得なければなら」らない、このように信じていた。このような論理が分離派の特徴であった曲面を多用するデザインの源泉であると考えられる。このような分離派の作風は、創宇社において宣言のみならず建築の造形表現にも色濃くあらわれている。

後段には「我等の生命・美しき『マツス』」、つまり建築の造形を自己の「生命」を同一視する認識、いいかえれば建築を媒介とした創造・表現の機会の獲得をめざすという中間的技術者特有の意識の反映を見ることができる。

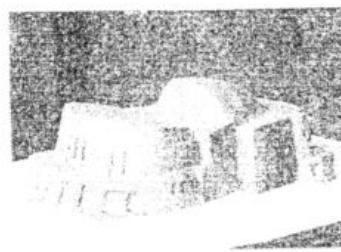
こうした宣言の内容から、創宇社結成当時の運動の目的が創造すること、表現することじたいにあったことは明白であるといえよう。

次に展覧会の作品とその主張についてみていくことにしよう。展覧会の目録からは同人それぞれが1点もしくは2点の作品を提出していることがわかる。同人たちには第1回展には専徒が2点出品した以外にはそれぞれ1点ずつの作品を出品した。作品の主題には専徒の《若き画家達のために「研究所」》、廣木の《劇場試作》、梅田の《或る「フィルム」社の映写場》、岡村の《音楽と野外劇のために》など芸術に関するものが多く、雑誌に掲載された図版もこの傾向を持つもののみであった【図1】。デザインの上での特徴としては曲線や曲面の多用、小さく縦長の開口部をもつことが印象的である。それらの建築作品はインクで清書された設計図面で表現されたが、添えられた模型がより彼らの志向を雄弁に表現していた。石膏や油土で制作されたそれらの模型は、タッチも荒々しく、細かなディテールの表現というよりは、より形態そのもののおもしろさ、量塊性・立体性の強調に意識が向いていたように思われる。だからこそ、個々の作品の制作意図は説明されず、模型や図面には着色されることもなかった。

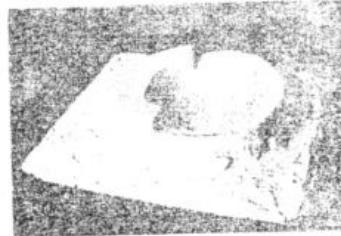
これらの作品の制作において設計図には彼らの本業であった製図の技術が存分に發揮さ

## 【図1】第1回展の作品

(『建築雑誌』15-3、1924年)



第1回展の作品  
（『建築雑誌』15-3、1924年）



第1回展の作品  
（『建築雑誌』15-3、1924年）

れだし、石膏による模型の制作法も官庁舎に使用するレリーフや繰り形のデザインを習得する際に省内で身につけたものであった<sup>27</sup>。そして、そのような制作法で表現された作品のスタイルもまた、石本が建築還元論で語った、抽象的で曲線を多用する分離派の作品からの影響を強く受けたものであった。しかし、第1回展における彼らの目的はすでに述べたように、建築作品の表現のスタイルよりも、表現することそのものに主眼がおかれていた。

第1回展のようすは、建築学会の機関誌である『建築雑誌』をはじめ、このころすでに数誌が発行されていた建築専門誌に掲載された。なかでも『建築新潮』に掲載された岡村蚊象の記事<sup>28</sup>は第1回展における創宇社の思想をよくあらわしているものである。岡村蚊象はまず創宇社結成の動機を次のように語る。

帝都復興の気運急なる今

吾々は芸術味豊かな美しい東京市を建設すべく建たなければならぬではありませんか。それが建築家としての「つとめ」だと思ひます<sup>29</sup>

創宇社はこの「つとめ」を果たすために展覧会を開催したというのである。ここからも創宇社の運動が震災という経験なしには起こりえなかつたことがわかる。この意見表明のあとに同人らが理想とする建築が語られる。それによれば、同人らは「模倣と伝統」から覚醒し、「災いされた建築芸術に一日も早く清新なる生命のやく動を求める」たいのだといふ。しかし、それには大きな制約があった。「I-2」でみたような中間的技術者の意識と労働の実態のあいだに生まれる葛藤である。このことについて岡村蚊象は次のように心情を吐露する。

専心建築の本道に進むべく努力はしながらも実生活に於いての周囲の関係やパンの問題やのために知らず識らずの中に建築の本質に離れ、理想に遠ざかり、妥協を余儀なくされ、遂には尊い創造の心も不純なものにしてしまひ勝ちです

[中略]

私たちは全力を挙げてこれと戦はなければなりません<sup>30</sup>

これが創宇社同人のもっとも重要な主張である。ここにはどのような建築を理想とするか、ということではなく、どのように建築を制作するかという、労働に関わる態度じたいが問題であることが強調されていることがわかる。彼らは建築による表現を通して「生命的やく動」つまり自己表現の充足を求めていたのである。しかし、そこには、大きな問題があった。実生活上の労働においては、序列化され細分化された通信省営繕の組織に阻まれてこの欲求は満たされることがないのである。このような「周囲の関係やパンの問題」をのりこえるためには、分離派が作り上げた、団体によって行われる展覧会や雑誌などのメディアを利用した建築作品の発表というスタイルが、労働時間外における創造・表現の実践の機会を創出するためには非常に適合的なものとしてとらえられたのである。

このように創宇社においては、さきにみた石本の論はじめ分離派の思想のなかでも、新技術によって構造とデザインを一致させようとする方法論や、新建築の形態論的考察には無関心のようにみえ、一方、過去の伝統への固執と模倣に対する嫌悪と、本能と感覚による建築制作という思想のみを積極的に取り入れているように思われる。この2つの特徴は、創造や表現の欲求を持つ一方で、歴史的建築様式の参照と模倣という伝統的かつ権威

的なデザイン手法を身につけていない、いいかえれば高等教育での体系的な建築に関する教育を受けていない彼らが、そういった桎梏から自由にふるまうために有効だったのである。

第1回展の段階における創宇社同人の運動は、たんに既存の文化である分離派の活動を模倣したものというだけではなく、創宇社の運動の主体である中間的技術者に特有の意識を背景とした、「建築運動」的なスタイルを通じた創造・表現の実践だったのである。

創宇社の第1回展については、当時の代表的な建築ジャーナリズムであった『建築雑誌』、『建築新潮』、『建築画報』にとりあげられた。そこで創宇社に肯定的な評価を与えたのは創宇社の源流である分離派の同人たちであった。分離派同人は技術偏重の建築界に異議申し立てを行い新技術とそれに適合的なデザインを模索していたが、職場の人間関係を足がかりに彼らのスタイルを踏襲し、また教養主義的な常識を持たず、全く過去にとらわれない建築制作を行う創宇社同人の制作態度を高く評価した。しかし、一方では瀧澤の論評にみられるようにあくまで構造とデザインの合理的な解決を目指す分離派と、日常生活の桎梏から自由に創造、表現することじたいを最大の目的とする創宇社のあいだには意識上の相違もみられることがわかる。

岡村が、第1回展は「災後間もない時であつたので製作能力も乏しかつたし其の他の事情のために思ふほどの結果をみることが出来なかつた」<sup>31</sup> というから、展覧会への入場者はそれほど多くなかったのかもしれないが、創宇社は展覧会そのものよりも、人間関係のネットワークを利用して、メディアへの露出を重ね、建築界に認知されていくことになる。

### III 関東大震災後の社会と創宇社建築会

#### 1 関東大震災後の文化状況

第1回展にみるように、創宇社の運動は既存の文化から採り入れたスタイルを利用した「中間的技術者」による労働時間外での創造・表現の実践の拠点としての顔をあらわす。しかし、創宇社は、職場ではさほど大きな力を持たない、建築界の周辺的存在であった。それにもかかわらず、この創宇社の運動が 1920 年代を通じて継続した背景には震災復興期の文化状況が抜きがたく存在している。ここでは国民美術協会の動向を中心に震災復興期における建築界と芸術界の関係に注目し、そこでの創宇社のふるまいと運動への影響をみたい。

#### 帝都復興と文化運動

国民美術協会<sup>32</sup> は毎年春に協会主催の展覧会を開催することが恒例であり、1924 年 4 月には上野竹之臺陳列館の半分を借りて、3 回目の「仏国現代美術展覧会」を開催する予定であった。しかし、その予定は変更され、協会建築部を中心として開催される「帝都復興に関する創案展覧会」に改め、その半分をフランス現代美術の展示に充てることを決定し、1923 年 11 月 8 日には展覧会委員が選定された<sup>33</sup>。新しい展覧会には「建築、公園、壁画、彫刻、室内装飾等を総合した大展観」<sup>34</sup>となることが期待された。計画変更は、震災の打撃により沈滞した美術界の復興への働きかけであり、同時に震災以来実用的方面

に偏りがちな思想状況のなかでいかに存在感を示すか、という非実用的な活動を生業とする芸術家たちの模索でもあった<sup>35</sup>。

こうした動向は協会に限られたものではなかった。日本画会は翌年2月に復興展覧会を開催することを決めた<sup>36</sup>。前衛芸術家たちはバラック装飾社を組織し<sup>37</sup>、焼け野原に叢生するバラックに、ペンキで原始的なモチーフによる装飾を施していった。バラック装飾の運動には彼らだけでなく多くの芸術家が手を染めた。それは、「糧道を確保するとともに画家として社会に貢献することに心をくだ」<sup>38</sup> こうとする心情の現れだった。芸術団体のみならず、社会問題に関心を持つ知識人たちは「罹災者救援思想団」を組織し、物品・金銭の寄付を募り罹災者に配給しようとした<sup>39</sup>。震災直後の東京においては、復興の気運に呼応して何らかの働きをなそうとする動きが文化の領域において広く現れていた。

これら文化界の動向と、震災によって彼らじしんが打撃を受けるなか、いかにして勢力を回復し、社会に存在感を示すか、という問題に対する解決策を見出す過程だった。とりわけ実用本位の風潮のただなかにあって、芸術家の団体が大きな存在感を示すことは困難にみえたが、なかでも国民美術協会は東京の復興過程において美術による精神的側面の復興が重要であることを主張し、その困難を乗りこえようとしたのである。

#### 帝都復興創案展覧会にみる運動スタイルの定着

以上のような事情を背景に、国民美術協会が1924年の展覧会を「帝都復興に関する創案展」に改めたことはすでに述べた。この頃、協会建築部主任であり、計画の中心人物のひとりであった早稲田大学教授の今和次郎は、『国民美術』に「建築創案展覧会に就いて」<sup>40</sup>と題した論文を寄せて、展覧会についてのアイデアを披瀝している。それによれば、まずもってこの展覧会は「美しき都市のため、美しき建物の為めにそれらの創案を広く集めること！」を目的としていたが、そのために今は3つの特徴をしめした。

第一に、「各団体に一つづゝの区劃された室を呈拱」することである。今は多様な思想を持つ建築家・芸術家たちに、ひとつの価値観を強いて、それぞれの特徴を發揮させることを可能にし、広く出展者を集めることを企図していた。これは貧弱な協会建築部を補う意味もあったのだろうが、多くの団体を集め、この展覧会に出品するための団体の結成を促した。

第二に、「創案」の展覧会であることの強調である。今は従来実際に建設された建築のみを高く評価する風潮があったことを批判し、実現性にとらわれない、純粹に理想的に練られた建築の案を展示することの意義を説いた。これは震災という特殊な状況だからこそ正当化されるのだが、この今のアイデアによって、創宇社同人の作品のように実現する可能性がほとんどない建築作品をつくる意義が認められる。

また、建築家以外の団体の参加も期待した。これにより、マヴォなど前衛芸術団体による建築作品の展示もみられることになる。

このように今の展覧会の計画は、団体の結成を促し、実現可能性の低い「創案」の価値を認め、他分野による建築への関わりを促進させる、といった一連のアイデアを示した点で、分離派や創宇社が先行して展開した建築運動のスタイルを強化する可能性をもっていたのである。それではその可能性はどのように開花していくのだろうか。

## 展覧会の開催

翌1月20日には、評議会の席上において、今の計画に基づき「国民美術協会主催帝都復興創案展覧会規定」と「大震火災記念造営物創案懸賞募集規定」が決定され、展覧会の名称・目的・会期・会場などが定められた<sup>41</sup>。また、建築を中心とする展覧会の厚みを増すためであろう、建築部に3名、装飾美術部に6名、会誌を編集する学芸部に3名の新入会員が評議会の銓衡の上で認められた。そのうち建築部への入会者には分離派の瀧澤眞弓、創宇社の岡村蚊象が含まれており、学芸部には野田俊彦が入会している<sup>42</sup>。

参加団体については主催の国民美術協会のほか、団体での参加として、マヴオ、木材工芸学会、分離派、創宇社、メテオール、ラトウ、庭園協会、綜合美術協会、揚風会が展示を行った<sup>43</sup>。このうち、マヴオは前衛芸術グループであり、木材工芸学会、庭園協会は名前から知ることのできるように、建築の隣接分野の団体である。さきの今の意図に沿って建築以外の分野からの出品もこのように実現している。また純粋な建築家の団体のうち、メテオール、ラトウはそれぞれ早稲田大学、東京帝国大学の出身者によってこの展覧会を契機に結成された団体であった。揚風会も東京美術学校建築科卒業生らによるグループだったという<sup>44</sup>。建築専門の団体ではないが綜合美術家協会も東京美術学校の岡田三郎助、岡田信一郎らにより結成されたばかりのものであった<sup>45</sup>。同展は教育機関などでの人間関係を基礎にした、団体の結成をも促したのである。

同展は4月13日から28日まで開催された。開催初日、協会会长の中條精一郎が展示を一巡し、同展の規模が建築をテーマとした展覧会としては「未曾有の事」<sup>46</sup>であることを喜んだように、その規模は大きなものとなった。展示室では参加団体がそれぞれの立場からそれぞれの「創案」を展示した。中條が激賞した中村順平の作品をはじめとしたいくつかの都市計画案や、建築家や彫刻家がそれぞれ異分野への進出を試みた作品などもあった。また、会期中には「復興に関する講演会」も開催され、佐藤功一、堀口捨己らが海外の都市・建築事情などについて講演していて、この展覧会の特徴を示している。

## 展覧会の受容

ところで、この展覧会は社会的にどのように受容されたのだろうか。新聞では『東京朝日新聞』、『中外商業新報』などに連記事が散見されるが、展示の概観や、懸賞の受賞作品の報道などが主であり、ささやかなものだった。そういう意味では、社会全体に多くの影響を与えたとはいえないかも知れない。しかし、一方で美術・建築両界において、各メディアは同展に非常に大きなスペースを割いてその様子を伝えた。最も早く同展についての報道を行ったのは、当然ながら主催団体、国民美術協会機関誌『国民美術』だった。同誌5月号は「復興展特別号」と題され、会期が始まって間もない段階で寄せられた各関係者からの原稿により編集された<sup>47</sup>。これ以外にも、当時の有力な建築関係書籍の出版元だった洪洋社の『建築新潮』<sup>48</sup>や、美術雑誌『中央美術』<sup>49</sup>などにより同展は詳報された。このように会場での直接の観覧だけでなく、雑誌メディアが同展の内容を周知させる太い回路となっていた。この回路を通じ、同展は建築界および美術界に相当広く認知され、展覧会で確立した建築運動の思想・作風といったそのスタイルが大きな影響を持つようになつたと考えられる。

## 2 帝都復興創案展覽会と創宇社

### 参加までの過程

創宇社はどのようにして同展に参加するにいたったのだろうか。岡村によれば、「〔1923年：引用者中〕十二月にはじめだつたらうと思ふ。早稲田の学校で今さんにお会ひした時、今度の展覽会のことを先生からお聞きしたのだった」<sup>50</sup> とあるから、11月中旬に開催された創宇社第1回展から非常に間もない段階で同展への参加が考えられていたことになる。どのような経緯で岡村が今と会見するに至ったのかは不明であるが、同協会建築部会員であり、分離派同人であり、また早稲田大学理工学部建築学科選科に学んだ濱岡周忠や、分離派同人山田守から岡村へ何らかの働きかけがあったものと推測される。とすれば、さきに述べた分離派同人たちによる第1回展評は、今からの打診を既に受けていた上で掲載されたものであるから、これらは創宇社が同展に参加するための布石としてとらえられていた可能性もある。そして、明くる1月20日には、すでに述べたように岡村が協会建築部会員として認められ、4月の開会に向け創宇社参加の条件は整えられていったのである。このことはほかの参加団体が大学を中心としたエリート建築家たちのグループがほとんどであったことを考えると奇異にさえ感じられるが、さきにみたような震災という偶発的な出来事によってうみだされた文化状況があったからこそ実現したのである。

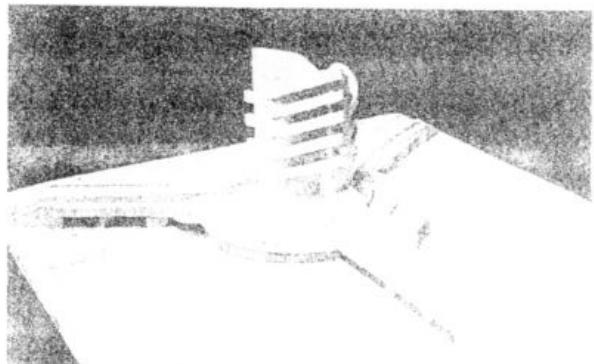
ところで、同展に臨む創宇社同人の意識とはどのようなものだったか。岡村は今から展覽会への出品の勧誘を受けたとき、「我々自身の微力を省みてそのあまりに仕事の大きすぎることに辟易せざるを得なかった」<sup>51</sup> という。しかし、同人らは「どこまでも各自の個性を糊塗することなく考へぬいて行かうとする強い心」を頼りに出品にこぎつけた。同人らは作品の価値が「烈しい製作慾と平衡にいってゐるかどうか」が不安ではあったが、「作品個々から自身が新しい道を開いて行かうと努力する、鮮明な個性の閃きを感受していたゞけるであらうこと」<sup>52</sup> を信じてもいた。この段階においても、「烈しい製作慾」を背景とする、創造・表現行為そのものに価値をおく傾向があらわれている。

### 出品作について

同展には従来いわれていた岡村と梅田だけではなく、当時の同人5人全員が出品している<sup>53</sup>。岡村は《丘上の紀念塔》、《K氏の住宅》、《商業区域》の少なくとも3作品を出品しており<sup>54</sup>、このほか《美術館》を出品したとする文献<sup>55</sup>もあるが、その典拠は不明である。梅田は《塑人の家》と《美術館》を出品したという<sup>56</sup>。専徒は《民衆のために》と題した劇場と市場の複合施設の計画<sup>57</sup>を出品した。廣木は《紀念館》、小川も会館または、それに類するものを出品したという<sup>58</sup>。作品の主題選択の傾向もまた第1回展と大差はない。ただし、同展で開催された設計競技を念頭に置いた震災を記念する建築作品が制

【図2】岡村蚊象《丘上の紀念塔》

(分離派建築会・関西分離派建築会『分離派建築会作品集第三』岩波書店、1924)



作されていた。

これらのうち、最も注目を浴びたのは岡村の《丘上の紀念塔》であった【図2】。この作品は丘の上に造成する人工池の中心に3つの扇形が束ねられたような平面をもつ塔屋を配置するもので、塔へのアプローチは池の周囲からのびる3つのスロープを配置するというものであった。塔屋の中には劇場や陳列館などを配置することが考えられていた。そのデザインにおいてはそれぞれ高さを違えた3つの扇形の塔とその外周をめぐる外付けの階段（もしくはスロープ）が規則的に配され、第1回展で岡村が見せたような、彫塑的な美とはまた異なる、規則性の美とでもよぶべき印象を湛えている。従来の歴史主義的デザインの伝統からは全く逸脱した作品が提示された。この作品は岡村の名を広める契機となり、多くの建築家が批評を加えた。

岡村の作品は、その造形の新しさで注目を浴びる一方で、佐藤武夫が喝破したように、デザインが含むべき建築の機能、性能については驚くほど無頓着であった<sup>59</sup>。佐藤は創宇社の水準が分離派に達していない<sup>60</sup>とか、「創宇社の部屋は〔分離派より：引用者注〕もつと空想的」<sup>61</sup>といった批評を加えた。逆に言えば、建築家たちは創宇社同人たちのもつ、建築作品を一義的に創造・表現のためのメディアとする思想に大きな違和感を持ち、注目していたということができる。このことは前述の創宇社の運動の背景にある意識からすれば至極当然の帰結であるといえ、またこのような批判の存在は創宇社と既存のエリート的な運動との間の差違を示すものだ。

以上のように、創宇社の運動は、震災復興期の美術・建築界の動向のなかでその運動のスタイルを確立しつつ、両界の構成員に認知されることによって、運動継続の土台をつくっていったのである。

## おわりに

以上、みてきたように、創宇社の運動は、大規模化する建築市場と建築生産組織の高度な分化のなかで出現した中間的建築技術者たちに特有の労働に対する意識、いいかえれば創造や表現に対する欲求の発露だった。彼らの運動のスタイルは既存のエリート文化のそれに強く影響を受けたものだったが、受容の過程において自身の論理でその運動のスタイルを読みかえて彼らじしんのものにしていったのである。

彼らの小さな運動が1920年代を通して存続してきた要因として見過ごしてはならないのは震災後の文化状況である。1910年代、噴出する都市問題への関心は政治家・技術者などの専門家のあいだで高まっていたが、未曾有の大災害としての大震災は直接に東京の住民に都市の脆さを経験させた。ここに、都市あるいは都市を構成する単位としての建築の問題に全体社会がフォーカスしていく状況が生まれる。こうした状況のあらわれの一局面が国民美術協会による帝都復興創案展覽会であり、そのなかで非専門家としての創宇社にも理想的な都市・建築の表現の実践が可能となり、運動が存続する基盤が生まれたのである。

このように創宇社の結成当初の運動とその思想は、生活の充実という目的のために重要な創造や表現を求めたこと、そしてそれを既存のエリート文化やメディアを利用

し、読みかえながら実現したことにおいて、1910年代から1920年代、都市化が進行するなかでの非エリート文化の特徴をよく示すものだったといえる。だとすれば、今回の報告では結成の過程とその背景となる同人たちの意識について注目したが、今後、これらの問題を深化すると同時に、その建築や都市の表象あるいは都市論を掘り下げていくことで、これまで主としてエリート文化の所産、あるいは文化状況の総体的な分析を通して考えられてきたこの時代の社会認識、都市認識にかんする歴史像を更新することが可能ではないか。

- 
- 1 「中間的技術者」の概念については初田亨の「中堅技術者」の議論などを参考にした。（初田亨『職人達の西洋建築』講談社、1997年など）
- 2 稲垣栄三『日本の近代建築〔その成立過程〕』上下、鹿島出版会、1979年（『日本の近代建築——その成立過程』丸善、1959年）
- 3 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』日本放送出版協会、1977年
- 4 岡村（山口）蚊象（文象）については『建築家 山口文象 人と作品』相模書房1982年を参照
- 5 中村鎮編『後藤慶二氏遺稿』後藤芳香、1925年
- 6 『中央工学校六十年史』中央工学校、1971年
- 7 長谷川堯ほか『建築をめぐる回想と思索』、1976年〔岡村による回想〕
- 8 梅田穣『老兵は消えるか』都政企画、1981年
- 9 近江栄『建築設計競技』相模書房、1986年
- 10 「歴史の会の記録」〔創宇社同人による座談の記録未刊行、竹村文庫蔵〕
- 11 梅田穣「山口文象の思い出 一創宇社旗揚前後一」『建築とまちづくり』34、新建築家技術者集団、1979年8月、55ページ
- 12 濱岡周忠「最近建築と原始人の心」『建築画報』15-3、建築画報社、1924年、9ページ
- 13 鈴木実「山口文象年表」RIA建築綜合研究所 近藤正一『建築家山口文象 人と作品』相模書房、1982年。鈴木による年表ではこの設計競技への参加は1925年のこととしてあるが、近江栄『建築設計競技』には同競技が1924年4月から7月15日まで行われたとの記載があり、「佳作2席」に「山口穣」の名がみえる
- 14 同上
- 15 前掲梅田「山口文象の思い出 一創宇社旗揚前後一」55ページ
- 16 鈴木貞美『「生命」で読む日本近代』日本放送出版協会、1996年
- 17 長谷川堯「大正建築の史的素描」『神殿か獄舎か』相模書房、1972年、145ページから150ページ
- 18 今村明恒「関東大地震調査報告」震災予防調査会『震災予防調査会報告』100（甲）、岩波書店、1925
- 19 前掲稻垣『日本の近代建築〔その成立過程〕』下、鹿島出版会、262ページ
- 20 前掲梅田「山口文象の思い出 一創宇社旗揚前後一」57ページ
- 21 「第一回創宇社建築制作展覧会目録」1923年、竹村文庫蔵
- 22 同上
- 23 宣言の一部に専徒の意見が含まれていることについては、竹村新太郎「木挽町遞信省の話し補遺」『竹村文庫だより』3、竹村文庫、1986年による
- 24 たとえば「現建築界の覚醒」は分離派宣言の「過去建築圈内に眠つて居る総てのものを目さまさん」の書き換えだろうし、「母への憧れ」のフレーズ、建築を「交響楽」に喻えることは、分離派同人矢田茂の詩にみられる表現である。
- 25 石本喜久治「建築還元論」『分離派建築会宣言と作品』岩波書店、1920年
- 26 同上、2ページ
- 27 「歴史の会の記録」
- 28 岡村蚊象「創宇社とその第一回展」『建築新潮』5-2、洪洋社、1924年、4ページ
- 29 同上
- 30 同上
- 31 岡村蚊象「創宇社から」『国民美術』1-5、国民美術協会、1924年、17ページ
- 32 国民美術協会は1913（大正2）年3月、画家黒田清輝を会頭に据えて結成された芸術家の団体。同協会は「美術家共通の利害問題を処理」すべき機関として構想され、洋画部、彫塑部、日本画部のほか、建築部、装飾美術部、学芸部の6部で構成された事からも推しはかられるように、特定分野、派閥に偏重しないアカデミー的な組織作りが目指された
- 33 「国民美術協会会務報告」『国民美術』1-1、国民美術協会、1923年12月、22ページ

- 34 『美術月報』4-11、美術月報社、1923年11月、10ページ  
35 「改題迎春の言葉」『国民美術』1-1、1ページ  
36 『東京朝日新聞』1923年10月29日付、2ページ  
37 同上  
38 五十鈴利治『大正期新興美術運動の研究』改訂新版、スカイドア、1998年、292ページ  
39 『中外商業新報』1923年10月2日付、2ページ  
40 今和次郎「建築創案展覧会に就いて」『国民美術』1-1、20ページ  
41 「国民美術協会々報告」『国民美術』1-3、1924年3月、15ページ  
42 同上  
43 出品団体の名称は今和次郎「建築創案展覧会の感想」『中央美術』10-6、1924、6による  
44 五十鈴利治「マヴォの運動」『大正期新興美術運動の研究』改訂新版、スカイドア、1998年、508ページ  
45 結成時期については、『国民美術』1-5（1924年5月）による  
46 中條精一郎「帝都復興創案展覧会に就き」『国民美術』1-5、1924年5月、1ページ  
47 『国民美術』1-5  
48 『建築新潮』5-6  
49 『中央美術』10-6  
50 岡村蚊象「創字社から」『国民美術』1-5、17ページ  
51 同上  
52 同上  
53 濱岡周忠「ラトオと創字社と分離派のこと —帝都復興創案展覧会出品団体の内—」『国民美術』1-5、国民美術協会、1924年5月、10ページ  
54 同上、11ページ  
55 RIA建築綜合研究所編『建築家 山口文象 人と作品』相模書房、1982年や本多昭一『近代日本建築運動史』ドメス出版、2003年  
56 前者は『国民美術』1-5、1924年5月、16ページの図版のキャプションによる、後者は前掲濱岡「ラトオと創字社と分離派のこと —帝都復興創案展覧会出品団体の内—」および「建築創案展覧会の回想」『中央美術』10-6、1924年6月、中央美術社、169ページによる。同時に2作品に言及されることがないのであるいは同一作品か  
57 専徒の作品が「劇場及び市場」の計画であることは、佐藤武夫「展覧会を観て」『建築新潮』5-6、洪洋社、1924年6月、11ページによる  
58 前掲濱岡「ラトオと創字社と分離派のこと —帝都復興創案展覧会出品団体の内—」による  
59 佐藤武夫「展覧会を観て」『建築新潮』5-6、洪洋社、1924年5月、13ページ  
60 同上  
61 今和次郎「復興創案展覧会の感想」『中央美術』10-6、1924年

〔附記〕本稿は 2005 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

近現代史研究会会報 第61号

2007年10月6日発行

編集発行：近現代史研究会

〒186-8603

一橋大学経済研究所

佐藤研究室 気付

\*この会報の編集にあたり、津田塾大学国際関係研究所より資金のご援助をいただきました。